

2019 年度 日本時間生物学会学術奨励賞受賞者

基礎科学部門

受賞者 金 尚宏 氏 (38 歳)

講評

今回は基礎科学部門に4名の応募がありました。評価は、研究業績（研究内容、論文等発表、分野への貢献度）および日本時間生物学会への貢献度・将来性について、それぞれ5点ずつ、10点満点（5名の委員で50点満点）で行いました。応募者の研究業績はいずれも素晴らしく、得点は狭い範囲（4点差）に集中しました。貢献度・将来性については、少しばらつきました。その結果、僅差でしたが金尚宏氏が候補者に選出されました。

金氏は、東京大学大学院に在学中、TGF- β /activin のシグナル伝達系が概日振動のリセットに関与していることを見出し、*Nature Cell Biology* に第一著者として発表して以来、生物時計の分子機構に関する研究に従事しています。学位取得後、一時製薬会社の研究所に在籍していましたが、その間も生物時計の機能に関する論文を次々と発表してきました。2014年にはCaMKIIが概日リズムの発振に重要な事を明らかにし (*Genes and Development*)、2015年には概日振動に重要な protein kinase のスクリーニング法を開発しています (*Comm Integr Biol*)。2018年、東京大学の出身研究室に戻ってからは、基礎的研究の他にも、睡眠関連疾患の病態生理の解明と治療法の開発に力を入れています。氏は大学院時代から、企業在籍中の一時期を除いて、日本時間生物学会会員（会員歴10年）として学術大会には毎回ポスター発表を行い、学会への貢献度も高いと評価されました。

臨床・社会部門

受賞者 高江洲 義和 氏 (41 歳)

講評

今回は臨床社会部門に2名の応募がありました。評価基準は基礎科学部門と同じで、研究業績では高江洲史の評価が高く、一方将来性・貢献度についてはもう一人の応募者が優れていましたが、総合点で僅差でしたが高江洲氏が候補者に選出されました。

高江洲氏は、2012年、東京医科大学精神医学講座で博士論文を取得して以来、精神障害におけるリズム障害、特に双極性障害と体内時計の関係を追及してきました。2012年には、遺伝性の神経発達障害である Angelman 症候群の患者でメラトニン分泌振幅の低下と位相後退を報告し (*Sleep Med*)、2016年には双極性障害患者に見られる概日リズム障害の頻度を発表しています (*PLoS One*)。また2018年には、概日リズム障害が寛快期双極性障害の再発予測因子となることを *J Clin Psychiatry* に発表して、注目を浴びています。氏の主たる研究手法は多数の患者を対象とした疫学的解析であり、関連する多くの論文を発表しています。学会員歴は4年と必ずしも長くはありませんが、2016年に日本時間生物学会学術大会で優秀ポスター賞を受賞しており、臨床系会員の少ない時間生物学会での今後の活躍が期待されます。

選考委員長 本間 研一